

第8回

〔聞き手〕

歌田 勝弘

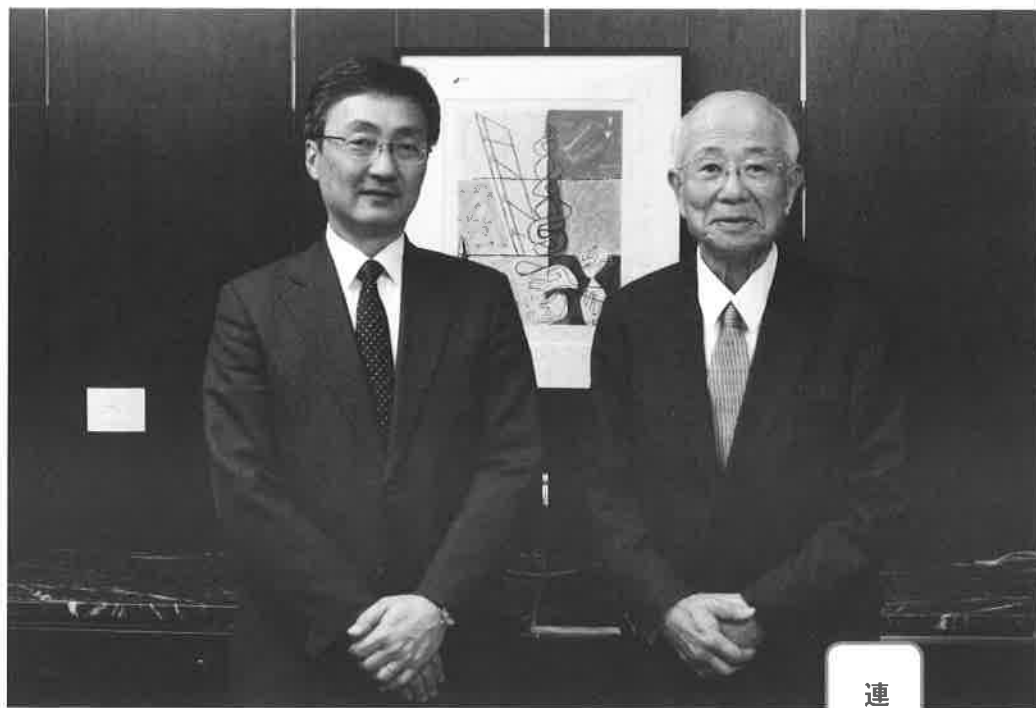
澁澤 健

〔味の素株式会社社友〕

〔コモンズ投信会長〕

報国とは国に殉ずることではなく
社会のため国民のために尽くすこと

澁澤 「博聞意伝」第八回は歌田勝弘さんにご登場いただきました。歌田さんは「食」、ことに「食の文化」を企業人の立場から極めて来られました。それにはバイオテクノロジー（生物工学）の面での研究もあり、だったと承知しておりますが、今日は「食」のことから発して詰まるところ「生」、生きることの源について、広くお考えを伺いたいと思っています。



私は戦争を知らない世代ですが、歌田さんは戦前・戦後を通じて「日本人の食事情」を体験され、そのことが「日本人の食」を考えられる上で礎になったのではないかと拝察します。そういったご自身の体験を通じた、「食」から「生きる」ことについてのお考えを、若い次世代に発していただきたいというのが、この対談の目的です。

歌田 私は『ほほづゑ』のメンバーの中では最高齢に属する者で、現在満八十九歳、数えでいうと九十歳になります。私の立場から若い世代へというのと、一体どの辺りの年齢層を指すのかという戸惑いがありますが、今私の孫が大学生であり、考えてみますと、山あり谷あり、山また山を越えてまた山幾層という私の人生のその中でも、一番印象に残っているのは、短期間ではあります大学生の時に軍隊に入隊したことです。それは、戦争が激しくなって、大学に入る直前に徴兵検査を受けさせられ、入学直後に陸軍の特別甲種幹部候補生として招集され、私は陸軍船舶部隊に配属されました。「暁部隊」とも呼称されていましたが、任務は

敵前上陸用舟艇を操作し、夜の間に敵軍の居る近くの浜辺に近づいて、明け方に上陸を敢行するために、歩兵や工兵などあらゆる兵隊や装備を運搬、揚陸することでした。当時船舶兵は最前線に出る兵種であり、特攻隊もあり、殊に戦死率が航空兵に次いで二番目に高いと言われ、招集された時には、友人から「いよいよお前も生きて帰れないな」と言われたものです。

澁澤 それは大学在学中、二十歳頃のことですか。
歌田 満十九歳の時ですね。昭和二十年の正月に入隊して八月の敗戦まで軍務に着いていました。それで九月に召集解除になり大学に復学するのですが、その八ヶ月の軍務は、私の長い人生の中ではほんの短い間ですが、一番強く印象に残っています。死を覚悟していたということもあつたのでしょね。

澁澤 十九歳の時に、来年、再来年はもうこの世にいないかも知れないと覚悟されていたということですか。
歌田 そうです。入隊令状が来た時から、周りの人達からは「もうとても生きては帰れないな」と言われて

いました。

終戦の時は瀬戸内海の四国に居りましたが、早朝の演習を終えて高松の近くの浜辺で休んでいる時に、通りかかった民間の人から「陛下のお言葉」があると聞き、近くの小学校へ行き玉音放送を拝聴しました。

澁澤 戦争が終わりそうだという前触れは無かったのですか。

歌田 まさかそういう事態になろうとは思っていませんでした。ただ日に日に戦況が悪化しているということは感じていましたし、私たちの部隊から特攻隊に行く人もいたし、既に戦死者も出ていました。我々船舶隊の司令部が宇品にあり、そこからの情報で新型爆弾（原爆）が落とされたということも知っていました。が、まさか敗戦になるとは思っていませんでした。

「終戦の詔勅」を聞き、帰営命令で本隊に戻ったところ、直属の中隊長が、この人は前戦の歴戦の勇士でしたが、「どうしても自分は承服できない。あくまでも鬼畜米英を叩くのだ」と言っていて息巻いていますし、

我々幹部候補生の仲間も「あくまでもお国のために戦うのだ」と言って指を切って血書を書く者もいました。が、私も、この際「今後、お国の復興のために尽くそうではないか」と互いに言い交わしました。

澁澤 「終戦」ということを聞かれた時、どのような感慨をお持ちでしたか。

歌田 それは、「お国のために身を捧げる」という教育を受けていましたし、軍隊に入ればなおのことでした。私の著書『わが人生』にも書きましたが、入営の際の東大の学生を送る壮行会が小石川の植物園であり、田中耕太郎法学部教授が壮行の辞を述べられて、「君たちはこれから戦争に行くのであるが、死に行くのではなく、武者修行のつもりで行け」と述べられました。その折私は、とんでもないことを言うものだと思いました。が、考えてみると、戦争で死ぬことだけが報国ではない、社会のため、国民のために尽くすことが大切なのではないかと思ひ至りました。そういったことが「終戦」と聞かされた時の感慨です。

その伝で言うと、平和国家日本の現在において、お国のためという考え方が随分薄らいでいるように思いますが、私の気持ちとしては、このことは確り^{しつこ}考えなければならぬと思います。

澁澤 同じ時代を共生している、そして、これからの時代に産まれてくる国民のために何をするか、何が出るかということですね。

健康の秘訣は、心身のメンテナンス

歌田 私は、人生においては「運」と「縁」とが切り離せない大事なものだと思います。運命というのは自分ではどうしようもないことですが、大切なのはそれにどう向かい合っていくかということであり、そのことを考えなければ駄目だとその時感じました。我々は軍隊のことを「運隊」と言っていましたよ。自分の意志にかかわらず、第一線にやられるか、あるいはやられないかも知れない。

澁澤 なるほど。運命というのは、運ぶ命と書きます

が、一方、宿命というのは宿る命と書きます。宿命というのは、どの親から生まれてくるかというように、自分ではどうしようもないことですが、運命というのは、取組み様によつては結果を変えられるというニュアンスがあります。運命というものは、自分の日々の行い^{わざ}や考え方で変わっていくものなのでしょう。

歌田 「運命」ということに関連したことです。が少し話の向きを変えさせていただくと、私は年齢の割に健康体であると自負しておりますが、よく「健康の秘訣は何か」という質問を受けます。私はいつも「五十%か、六十%は遺伝子でしようね」とお答えしています。親とか先祖から受け継いだ健康な体質の遺伝子です。残りの五十%か、四十%はメンテナンスということでしょう。メンテナンスには肉体的なメンテナンスと心のメンテナンスとがあつて、これを有効に機能させることが大切ということでしょう。遺伝子の方はこれはどうにも致し方ありません。そして同じ両親から生まれた兄弟姉妹でも、長生きする人、病気をする

人と、これは運という他はありませんね。

澁澤 生まれ持ったものが宿命であり、運命というのはメンテナンスをすることによって、授かったものを向上させてゆけるということでしょうね。

そして、ご縁、「ゆかり」ということですが、縁とは「つながり」といいますか、私がこうして歌田さんと知り合い、お話しをしているということもご縁であり、繋がってゆくことなのでしょうね。ご縁とは前もって決まっていることなのか、それとも常に変わってゆくものなのでしょうか。

歌田 これも両方あるのでしょうね。家族、家庭、そして学生時代、あるいは社会に出てから仕事の関係のご縁とか、様々な出会いとご縁がありますね。巧まずご縁が出来ることもあれば、近くに居てもご縁が繋がらないということもありますね。

澁澤 例えば、しばらく会ってない人のことをふと思いついて浮べていると、その人から連絡が入ったりすることがありますね。これこそご縁かなと思います。より良

く生きるためには運命とかご縁を大切にするということと、そしてメンテナンスの面においては、運動をするとか、「食」に気を配ることもその一つでしょうね。

歌田 そうですね。肉体の健康を保持するためには適切な医療を受けることも大切ですし、何と言っても運動が必要でしょうね。そういった肉体的なメンテナンスと、それ以上に心のメンテナンスが大切でしょうね。
澁澤 肉体的なメンテナンスにおいては散歩をするということも一つでしょうが、心のメンテナンスというかどうか、どういふことに気を配っておられますか。

歌田 ものごとをくよくよ考えない、なるべく前向きに考えるというようなことですね。

澁澤 例えば、歌田さんが何かに取り組んでいて壁に突き当たったような時には、ご自身をどの様に処されますか。
歌田 私自身、壁にぶつかつたとは思わないようにしています(笑)。いろいろ経緯はありますが、味の素株式会社という会社に入ったのもいわば偶然のことです。それまで全く無縁だった食品会社に入ったのですから、

それで次々と役職を歴任して、まさか社長になるなどとは思っていませんでした。社長、会長を終えてからも、経団連や経済同友会、バイオサイエンス、バイオビジネス振興、推進関連の団体など相当の数の協会や団体の役員を仰せつかりました。会社は昨年末をもって完全に引きましたが、現在もほとんど毎日用事で出歩いております。これもご縁ということでしょうね。

澁澤 味の素という、全く無縁だった食品会社に入ったと仰いましたが、どういう経緯がおありだったのでしょうか。



歌田 勝弘

歌田 語れば長い話ではありますが(笑)、私の父親は内務官僚でしたが、母の兄、私にとつての伯父は大蔵省に努めていました。それが裏と表、隣同士で住んでいたものですから、そうした家庭環境の影響を強く受けて、私が東大法学部に入ったのも、やがては国家公務員、官僚にという思いが強くなりました。ですが、軍隊に取られ、復員して復学しましたが、当時の公務員は戦争に負けたということもあつてか、評判は良くありませんでした。それに給料は良くはないし、公務員はやめた」ということになり、民間企業に職を捜すことにしました。しかし、今の様に情報が豊富にある訳ではありません。それでもなんとか三菱電機と味の素(株)の入社試験を受けました。一次試験を受けて、二次試験(面接)の知らせがないものだから、母校の東京高校のバレー部の、後輩たちの夏の合宿に同行しました。それで合宿から帰ってきたら、母親からひどく叱られました。「今日、味の素(株)の二次試験だった」のだと。それで「明日必ず面接に行かせま

す」と頼み込んで来たというのです。ところがその日は三菱電機の二次試験の日です。私はどちらの試験を受けるべきか悩みました。父親は内務官僚でそうした世情に明るくなく、それで大蔵官僚の伯父に相談したところ、「三菱は財閥解体の煽りで大変だとはいえ、なんといつても安定している。味の素という会社は工場が戦災に遭って主製品の生産も出来ないようだが、ひょっとしたらこの会社も面白いかも知れないと思う」ということでした。それなら先行き面白い方がいいや、ということで味の素(株)の二次試験を受けに行くことにしました(笑)。味の素(株)の口頭試問を受けに行ったところ、当時社長は空席でしたが、代表取締役だった道面豊信さんをはじめ役員の人たちがずらっと並んでいましたよ。そこで「君は他にも受けに行っているのではないのか?」と言われたものだから、「今日、振って来ました」と答えました(笑)。

そうした顛末があつて味の素(株)に入社したのですが、川崎の工場が戦災でやられ、その復興をしてい

る最中でした。それに原料は大豆や小麦ですから、当時は食糧難で主食にも事欠く時でしたから、それらを調味料に回すということは出来ませんでした。それで副業と言いましようかいろいろ食品加工をやりました。その代表的なものが、アメリカから輸入した大豆を搾^{しぼ}って食用油を生産することでした。それを主に横浜の工場で行っていましたが、私は入社していきなりその横浜工場に配属されました。私はびっくりしました。横濱に工場があることも知らなかったし、食用油を生産していることも知りませんでしたから。なぜなら当時は味の素(株)の食用油のブランドというのではなく、油脂配給公団が一括して統制配給していましたのでね。しかしこれが面白い工場でした。

味の素(株)を選択された、歌田さんの勤が当たったということですね。入社された時は創業から何年経った頃ですか。

歌田 明治四十二年(一九〇九年)が創業の年ですからね。創業から四十年近く経っていましたね。私が昭

和二十二年九月に学校を卒業して十月に入社しましたから、昨年末に退くまで、実に六十六年間味の素(株)に勤めたことになりました(笑)。

味の素(株)はどのような社風だったのでしょうか。まだ創業時の気風が残されていたのではないですか。先行き面白そうだと思われたくらいだから。あるいは大企業になりつつあったのでしょうか。

歌田 味の素(株)の創業者・鈴木三郎助氏は二代目の三郎助で、おおもとの初代三郎助氏は神奈川県三浦



健 澁澤

郡葉山で「滝屋」という穀物、雑貨を商っていました。明治の初めに腸チフスで若くして亡くなり、その夫人(ナカ)は生計のために、葉山を訪れる避暑客相手に間貸しをしていたようです。その避暑客の医師から助言を得て、浜に大量に流れ着く「かじめ」(海藻)を焼いてヨード灰をとる稼業を始めました。そして息子の二代目三郎助が鈴木家のヨード稼業を継ぎ、明治四十年(一九〇七年)に鈴木製薬所を設立しています。一方、東京帝国大学の池田菊苗教授が昆布の味のグルタミン酸ナトリウムを発見し、それを小麦粉から抽出する製造法を發明し、それをこの二代目鈴木三郎助と組んで企業化に成功しました。この二人の共同特許になっています。調味料「味の素」の誕生です。

こうして調味料「味の素」の生産販売を鈴木商店(大正元年に社名変更、昭和二十一年から味の素株式会社)として進めて来ましたが、戦後の財閥解体旋風にともなって創業家の役員が降りられて、大正六年のニューヨーク事務所開設以来アメリカで拡販に尽力されてい

た道面豊信専務が代表取締役役に就任されました。道面さんは永年アメリカ育ちで進駐軍の関係者とも人的な繋がりがあり、戦後の防疫散布薬DDTの生産を委託されるといふこともありました。アメリカから輸入した大豆から油を搾ったり、石鹼を作ったり、また佐賀に工場がありまして、佐賀ではテックスといつて防火用のボード（商標・不知火^{しらぬい}ボード）を生産したり、鍋釜まで、あらゆることをやっていました。

澁澤 そうですか。当時は生き残るためにあらゆることをやられたということですね。

歌田 私が入社したのは昭和二十二年十月で、道面さんが専務で代表取締役をしておられました。翌昭和二十三年の春に社長にられました。今思えば当時はまだまだ小さい会社でしたが、クリエイティブといひますか、イノベーション（発展性）に富んだ会社でした。それと早くから海外への進出に積極的でした。

「味の素」を発売して程なく（明治末から大正初年）、日本国内でも一般にはあまり知られていない時代に、既

に海外に、主に中国、台湾、朝鮮といった東アジアが中心ですが販売網の拡充を図っています。殊に中国には四つの製造工場がありましたが、これらは敗戦で全部失ってしまいました。戦後アメリカには先方からの要請もあり、まず輸出用だけ製造許可が下りて、昭和二十五年には統制解除になり順調に販路を伸ばしてゆきました。

澁澤 お話を聞いていて大変興味深いのは、創業間もない頃から海外進出が視野にあり、実行されていたということですね。

歌田 昭和二十五年から自由販売が出来たのですが、二十年代の末三十年始めにかけて私の先輩や同僚が、東南アジアは勿論、アメリカから南米、アフリカ、ヨーロッパと、海外にどんどん出てゆくようになりましたね。

「うまみ」を世界の「UMAMI」に

澁澤 歌田さんは味の素（株）に六十六年間勤められて、伺ってきたように、会社の成り立ちから今日の隆盛まで隈なく知悉されています。そこで改めて伺いま

すが、皆さんが共通して大切にされているもの、価値観はどのようなものでしょう。

歌田 味の素グループWAYというのがあります、それは、①新しい価値の創造、②開拓者精神、③社会への貢献、④人を大切にすること、私もそれを目指して来たと言えらると思います。

がしかし、現実には色々と問題が起きて、その内の幾つかを挙げてみましょう。まず第一に、全社揚げで常に科学技術の進歩に力を注がなければならないということでしょうね。それには事件がいろいろありました。一番大きかったのは、昭和三十一年に協和発酵がグルタミン酸生産菌による発酵法を発見して発表した時ですね。この方法は我が社も試みていたようなのですが先を越されてしまいました。従来味の素（株）は、小麦や大豆などのタンパク質からグルタミン酸を抽出していたのですが、発酵法の方が安価であるといふことで、現在はこの方法が主流になっています。ただ当時は社運に関わる大事件ですからね、私は当時労

働組合の委員長をしておりましたので、「一体どうしたということか」と会社に談じ込んだものでした。そうした折に、アサヒビールの山本為三郎社長が二社の間に入って下さって、一緒にやっつていこうということになり、協和発酵が作ったものを全部味の素（株）が販売するという協定が出来ました。協和発酵は食品を販売した実績がありませんのでね。しかし現在はまだたく別です。その結果、社内に幾つも分かれていた研究機関を一つに統合して中央研究所として川崎事業所に置きました。基礎研究から応用研究にいたるまで一括してここでやっています。

もうひとつは、一品だけではなく商品の多角化をしてゆこうということ。それからはいろいろな商品を開発、販売するようになりました。ケロッグ社のコーンフレークの日本での販売を引き受けたことや、CPCインターナショナルと合弁会社を設立して「クノールスープ」から始めて、その後マヨネーズの製造販売したり、冷凍食品も始めました。調味料分野でも

グルタミン酸ナトリウムだけではなく「ハイミー」

「ほんだし」「クックドゥー」などを製造販売しました。

「ほんだし」は私が業務部長の時に開発プロジェクトチームを作った商品で、今も一番大きい売り上げ品目になっています。グルタミン酸ナトリウムに鯉節のうまみを加えたものです。それが海外に進出するに従って、豚や牛、鶏などその国々で好まれるうまみとグルタミン酸ナトリウムを加えて「風味調味料」として世界中で愛用されて伸びています。

それから現在は医薬品、飼料とか化粧品にまで広がっています。

澁澤 つまり時代に応じて、イノベーションを繰り返して進化し続けて来たということですね。

歌田 ただ、突拍子もないことをやるというのはなく、やはりアミノ酸ですね。アミノ酸から派生した食品を究める過程でいろいろな新規の商品が出て来ているということですね。

澁澤 「うまみ」という感覚を、海外においてどのよ

うに伝えるのですか。

歌田 『ほづゑ』の新年号(第七十九号)の座談会でもお話ししましたが、「おいしさ」の基本味というものがありまして、色に四原色があるように、昔は味にも甘味、酸味、塩味、苦味という四原味よんげんみがあるという説が国際的に定着していました。ところが池田博士は、昆布の味のグルタミン酸の味はこの四つの味には無い味だということ、で、「うま味」を加え、五原味ごげんみと言いました。その後鯉節のイノシン酸や、干しいたけの味のグアニル酸も「うま味」に入りました。そして更にそれらが一緒に混ざると相乗効果が出るという研究も進み、一層「うま味」が一般化して来て、「うま味調味料」という言葉が定着して日本の業界に広まりました。一方、これだけ科学技術が進歩して来ており、世界に向けても使つてよいかという問題が出て来ました。そこで一九八〇年代に世界の学者に参集していただき研究してもらったところ、五原味という学説は現在でも間違いないということになりました。では名称はど

うするかということになりましたが、「うまみ」にピッタリ当てはまる外国の言葉がありません。デリシヤス delicious というのも違う、そこで U M A M I とローマ字表記して充てようということになりました。以来国際的にすべて正式に「うまみ調味料」という表記に替わりました。

澁澤 伺っていると「うまみ」というのは隙間を埋める妙味という感じがしてきますね。甘い、酸い、塩い、苦いだけでは埋めきれない隙間を埋める。人生における隙間を埋める「うまみ」も同様でしょうかね。

歌田 なるほど(笑)、例えば肉、牛肉とかトマトなどにはグルタミン酸が多く含まれています、ではその美味しさを、甘い、酸い、塩い、苦いだけで表現出来るかという出来ません。じゃあなぜ肉があんなに美味しいのかということになると、やはり「うまみ」を抜きに語れません。

少子高齢化と人口の減少を憂う

澁澤 歌田さんのこれまでの来し方の中から伺ってきましたが、未来へ向けてのお感慨を窺いたいと思います。歌田さんからご覧になって、こういうところが期待出来る。あるいはこういうところを心配している。ということをお話し下さい。

歌田 私が一番心配しているのは日本の人口減少です。少子高齢化がかなりのスピードで進んでいますね。あらゆる面において、人口が多い国の方が盛んですよね。だからこれからの日本はどうなるのか心配です。現状たしかにグローバル化、国際化が進んで来て、確かにアベノミクスでうまくいっていると言いますが、しかし、企業においても国内よりも、海外に進出してうまくいっているところが多いです。しかし食品業界は海外に出ているところは少なく、どうしても国内産業ということになり、そうすると人口減少が問題になって来ますね。企業としては海外進出でうまくいっても、国として考えた場合、それだけ生産額が落ちてしまうのですから、特に雇用については心配です。こ

の少子高齢化という問題はもつと真剣に考えなければならぬ。

少子高齢化で労働人口が急激に減少して、高齢者の比率が増えています。昨今は元気な高齢者が多いので、すから、定年制を延長するとか、高齢者が働けるようにすればいいと思います。それと、女性が社会に進出して働くのも結構です。ただ、すべての女性が働けばいいとは限りません。やはり子供を産んでもらって、その子供をきちんと育ててもらおうということが是非必要です。それは女性だけの問題ではなく、男性も、社会も子育てを支援しなければなりません。そういう意味では、今の家庭のあり様は大変心配です。親が不在で子供が問題を起こすということも多く耳にしますし、IT、スマートフォンなどの普及はいいのですが、電車やバスに乗るやいなや熱中して回りも見えないという光景も目にします。

澁澤 スマートフォンで電子書籍を読んでいるという人もいる筈ですが、ほとんどの場合はゲームをやつて

にとつても大事なことです。日本から発信してもいいのかも知れませんが、そういう意味においても、受け入れた異国の人たちが日本の相互扶助の価値観を、母国に伝えるということもあっていいのかも知れませんが、多様な価値観が入って来て、その結果自らの独自の価値観が明確に見えてくるということが大切ではないかと、私は思っています。

歌田 それともう一つ、日本国がこれだけ少子高齢化してくると、科学技術創造立国と頭脳労働の確立がどうしても必要になってくると思っています。そういう意味では今報じられている理化学研究所の事態は困ったものだと思いますが、あのような基礎研究の成果を、実社会の事業化に結びつける手立てが、日本はまだ遅れていると思います。そういう面における政治の対応や、行政の考え方にしても、研究模索しているとは思いますが、もつとスピードを上げて欲しいですね。そうでないと折角優れた研究をしても、よそに取られてしまいます。それは組織の問題もあるし、規制やべ

いますね。そして、少子高齢化という問題ですが、少子化に歯止めが掛つたとしても人口増に転化するまでには時間がかかります。その間、労働人口を補てんする意味で移民を受け入れるという考えがありますが、いかが思われますか。いや、日本は特異な文化を持つ国なので移民は受け入れられない方がいいと思われませんか。

歌田 そうですね。日本の労働者が不足して来ていて、それに対して海外から働き手を受け入れようという考えがありますね。私の考えは古いかもしれませんが、ほどほどにした方がいいと思います。やはり、日本の良さというのは、日本独自のアイデンティティにあると思つています。三年前の東日本大震災においても、あれだけの大災害に遭つても盗難事件がほとんどなくて、たとえそれぞれに宗教信仰を持つていても、みんながお互いを援け合つています。思いやりといひますか。このような日本古来の相互扶助の伝統というのは、移民が多くなるとどうなるのかなと思つています。

澁澤 そういう相互扶助の価値観というのは、全人類

ンチャーの問題もあります。

澁澤 日本にはいい素材が沢山あるのですが、それをうまく活かせていませんね。

歌田 遺伝子組換え食品などは、日本は完全に後手をとつてしまいました。

澁澤 今日は歌田さんの長年の「食」との取組みから様々なお話をうかがつてきましたが、最後に次世代へのメッセージを伺いたいと思います。

歌田 若い人へというよりも、私のモットー、好きな言葉ということですが、「人間の究極の幸せとは、人に愛されること、人に褒められること、人の役に立つこと、それから人に必要とされること」ということです。これは辞世の詞として書き記しておきます。

澁澤 ありがとうございます。

(うただかつひろ／しぶさわけん)

(収録・二〇一四年三月二十四日)